

カルストハンス考

— 文化史と文学史の狭間 (六) —

ランケのいう『澎湃として起った国民運動』の進展とともに、皮紙や筆写の時代からは想像もつかない夥しい文書、刊行物流通の勢いは一段と高まった。むろん大半はその場かぎり、一度かぎりで消えゆく運命にあったが、自と版を重ねるものもあり、後世史家の目にとまるものもあった。

小冊子『カルスト・ハンス』は、一五二一年初頭にエルザスのシュトラースブルクで上梓されている。いわゆるフルークシュリフテン（一五・一六世紀ドイツにおけるパンフレット形式の時事文書）の一種で、版元はヨ

ハン・ブリュースと目される。これが当地では名のしれたフランシスコ会修道士トーマス・ムルナーを風刺するものであることには、すでにふれたが、僅か一年足らずの間に、十種の刊本（シュトラースブルク二種、パーゼル三種、アウクスブルク四種）となつて、南西ドイツ一帯に流布している。単にムルナーという標的に関心が集まったからとは思えない。少し仔細にその内容を分析し、関連する文書や周辺の状態に目を配るのが、本稿の目的である。

カルストハンスという名称の謂れは、土をつきくずすのに用いる二股の農耕具カルストを持つハンスというに

新 井 皓 士

ある。ヨハネスの短縮型ハンスは、十四世紀から十七世紀にかけては最もポピュラーな名であり、典型的人物を意味する呼称として用いられる事が少なくなかった。よたろう、三太郎、そして太郎冠者などのタローが時に諧謔的意味合いを帯びるごとく、クナップハンス(しまりや)、ブラールハンス(ほらふき)、謝肉祭劇のハンス(阿呆)など、ハンスまたすでにその響きからして多少とも微笑を伴いがちだったのである。すなわち「カルストハンス」は一般には軽く農民を揶揄する気味あいを感ぜさせる名称であり、実際グリムによれば、十九世紀においてもエルザスでは農民の渾名として使われている。

文献上この語を初めて用いた例としてふつう挙げられるのは、シュトラースブルク大聖堂の説教師として名高いガイラー・フォン・カイザースベルクが一四九八年から九九九年にかけて行った、S・ブランドの『阿呆船』(一四九四)にもとづく説教の記録である。もっともカイザースベルクはラテン語でメモをつくっておいてドイツ語で自在に説いたとされるから、その記録はおそらく複数の記憶に頼るものであろうし、一五二〇年八月に印刷刊

行された初版の序文には、ガイラーの弟子ヤーコブ・エッヒャーの書いたラテン文をヨハネス・パオリがドイツ語に意訳したとある。ガイラー・フォン・カイザースベルク自身がこの語を用いたかどうか疑問の余地があるわけだが、いずれにせよそこでは、カルストハンスはパオエルン・クロッツとならんで、無知で粗野な輩のイメージを与えている。パオリはフランシスコ会士としてムルナーの先輩格にあたり、また上の説教集の版元はムルナーの著作の大部分を刊行しているヨーハン・グリューニンガーだが、面白い事に、この書の約四カ月後に出た『カルストハンス』は、むしろトーマス・ムルナーこそ自己の名親である事をほめかしているのである。パオリの名著『戯れと戒め』(一五二二年刊)がこの頃のムルナーの著述中に何度か暗示されている事もあり、この二人の関係にはいささか興味をひかれる。

テクストはふつう全紙(ボーゲン)四枚分すなわち四折版一六丁(三二ページ)に印刷されている。例外はベッキングの『フッテン全集』第四卷六一七ページ以下に記載された諸版の比較でヌメルス三とされた全紙三枚一

二丁のもので、これは序文にあたる部分が最後のページに付け足されていることから推定されるように、あまり良心的なものではないらしい。筆者は当時刊行された諸版の中、ベッキングが一、二、六、七の番号を付したものを、マイクロフィッシュにより読むことができた。

(一)は初版とされ後述の四登場人物を描いた版画のあるもの、(二)は同様の版画をもち本文の末尾に四行詩のあるもの、(六)は版画がなく末尾の四行詩のみ持ち、(七)はカルストハンスとみられる一農民の姿を描く独特の版画と「フリーハンス」と題した五十行の詩をもつものである。ベッキングは(一)を底本としつつも、(二)の四行詩および(七)の版画と「フリーハンス」をも採用している。

『カルストハンス』は五人の登場人物による対話編なしいは品の良い謝肉祭劇の面影がある。その五人とは、トーマス・ムルナー、カルストハンス、大学生、メルクリウス、そしてマルティン・ルターであるが、このうち終始対話を続けるのはムルナーとルターを除く三人であり、ムルナーとルターが直接対話する場面もない。というより、ルターの登場はもっぱらムルナーを放逐し場面

を払い清める役割を担うかのごとくであり、それかあらぬか、(一)や(二)の版画にはバレッタ帽の老人メルクリウス、猫の首を据えられた修道士姿のムルナー、ガウンを着た大学生、ブントシュー（農民靴）をはきカルストを持ったカルストハンスのみが描かれ、ルターの姿はない。

版面については(七)が独特のものなので簡単に触れておく必要がある。他と同様タイトルページを飾るものではなく、頁の余白を一杯に埋めるのではなく、枠付きのカットの形でタイトルとのスッキリした調和が図られており、優れた審美眼が感じられる。描かれているのは、弓状にゆるやかに曲がった柄を下にして鋤をかつぐとも杖にするとも言えぬポーズで、短剣を左腰にさし前方を凝視する農民の横向き姿である。その鋤（カルスト）が、他の版画と異なり、二股ではなく三又である事も注目されるのだが、この図がゼバステイアン・ミュンスターの『コスモグラフィア・ムンデイ（世界誌）』のスイスの章で駒絵に使われている事に筆者は偶然気付いた。その直前にはヴィルヘルム・テルの逸話が記載されており、バーゼルの子供から一五五〇年に刊行されたこの書に、

カルストハンス図が再現している事に筆者は単に書誌的に留まらぬ興味を覚える。というのには後に触れるように、一時期農民を象徴する人物像になった感のあるカルストハンスは、いわゆる大農民戦争以後、ぱったりその姿を消したとされているからである。

対話編『カルストハンス』全体の構成は、ルターの登場場面をはさんで前後二部に分けることができる。前半は「ルナー」という人物を茶化し後半はその主張を批判する形をとっている。本文が「a a 2」から「d d 4」まで——現代風にいえば一頁おきに——丁付けされている初版では、「b b 2」表頁の始めまでが前半、「b b 4」の裏頁二行目以降が後半である。因に、ベッキングを始めとする近代の刊行本は対話の発言者毎に行をわけ見やすくしているが、当時の版は全く行分けせず発言者名、発言内容、つぎの発言者、その内容、という具合に、追い込みの形でべたに印刷されている。全紙四枚におさめる技術上および経費上の理由からであろうが、あまり読みやすいとはいえない。

本来の対話編が始まる前に、この冊子の主旨を説明する序文がある。曰、さる聖職者にしてえらく学識を自負する男がいる。その肩書と位を悪用し、羊の装いをして狼の悪だくみを働き、兄弟の警告と称して公然と誹謗攻撃し、小賢しい理由をつけて、実にうさんくさい外来の愚説を述べる。数多の馬鹿げた例証や異教的証明により破滅の淵へと人を導くローマ教皇を弁護する。この無知な神学者最大の目論見はキリスト教信仰をば「ローマ教皇という」現世の生身の君主制かつ異教的な支配の上に基礎づけ安泰にし固めあげる事、だがこの愚かな目論見、書いたものとして己が名のもとに公にすれば自ら犯人を名乗ってでるようなものかも知れず、また聖書に関する己が知識の乏しさが笑いものになるかも知れず、とはいえまた一層の名声と報酬の口火となるやもしれず、御当人いざれとも見きわめつきかね、名を匿し叢にひそむことになつた(諺に云う、ヘビハ草ムラニ身ヲカクス、と)。博学にして神のごときマルティン・ルター博士によってラテン語で語られ書かれているものに、この敬虔な御仁は同じ言語ではなく(おそらくはその大芸当があまりまねく喧伝されないことを恐れてか)ドイツ語なんぞで

挑み掛かった。その無知ぶりが〔ラテン語を解する識者によって〕はつきり指摘されたり、野心、欲得、妬み心が悟られたりせぬ為ではあろう。だが仕事によってその人となりはしれるとか、彼とてもその運命はさけられない、云々。

ここで揶揄されている「無知な神学者」がトーマス・ムルナーであることはいうまでもないが、「兄弟の警告」および「ローマ教皇の弁護」はそれぞれ、ムルナーが一五二〇年十一月二四日に発表した『ヴィッテンベルクのアウグスティヌス修道会のいと博識なる博士マルティン・ルターに対する、キリスト者として兄弟としての警告』および同年十二月十三日に公にした『教皇制度について、即ちキリスト教信仰の最高当局について』を暗示する。この両書が後半部における批判の対象になるはずだが、これによって『カルストハシス』が早くとも一五二〇年十二月中旬以降に書かれたものとなりあえず断定する事ができる。ムルナーはしかしこの年十月にルターの『教会のバビロン捕囚』をドイツ語に翻訳した後、上の二編を含む計四編の論文を書いた。残り二編中『マルティン・ルター博士の教義と説教について、その邪推に

して全面的には信じ難きこと』(一五二〇、一〇、六)はともかくとして、四編中最も力のこもった十二月二四日発行の『ドイツ国民の貴族諸侯に寄せて』について、この序文がなんら言及ないし暗示していないのはやや奇異の感を与える。なぜなら『カルストハシス』本文は最後の数頁においてこの書の内容に触れているからである。ただし後にみるように、それは当該書の前半部に限られる。翌年一月十三日にはムルナーがシュトラースブルク市参事会に『カルストハシス』販売禁止を提訴している、即ち『カルストハシス』がすでに印刷刊行されている事を考え合わせると、著者がこの序文を書いた後ムルナーの第四書を入手し、直ちに関連部分を付け加えたものと推測される。序文でいわば予告され、また作中人物ムルナーの口からも宣伝される『兄弟としての警告』が、実際はむしろこの『ドイツ国民の貴族諸侯に寄せる』に関する部分に押し退けられた形となって、本文末尾部で申し訳程度に言及されている事もこの推測の理由である。『カルストハシス』はこの種の文書としては、『エッキウス・デドラートウス(角をとられた角氏)』に比肩できるといってよいほど、作品としても練れたつくりである

——さればこそムルナーは『ルター派大阿房が事』で総反撃せざるをえなかった——が、上の部分だけはいささか破綻をきたしているのである。このことはまた匿名の著者には、時間的に充分な余裕をもって全体を推敲しなおせるほど即座にはムルナーの新刊が手に入らなかつた事、即ち彼がシュトラースブルク在住者ではない可能性を示唆すると言えるのかもしれない。いづれにせよ、『カルストハンス』は一五二〇年と二一年の歳末歳首にかけて、書かれ印刷されたものである事は疑いない。

「名を匿し叢にひそむ」云々、については、ムルナーの名譽のために付言する必要がある。上記の各書には確かにムルナーの名は直接に表記されていない。だが「匿名の誹謗書」ではない証しとして各書末尾に、著者として「シュトラースブルク司教に名乗り出ている」と、真に関心を有する者には司教の口からその名が明かされること、を彼は断わり書きしている。実際、著者はムルナー、と反対陣営にもすぐ知れていた事は、例えば『兄弟としての警告』が刊行された当日、マルティン・ブツァー(一四九一—一五五一)がヴォルフガング・カーピト(一四七八—一五四一)宛てに書いた手紙によ

っても、明らかである。つまり匿名性攻撃は言論戦(リテラトゥーア・フェーデ)盛んなりし当時の常套戦術にすぎないと言って良いのだが、攻撃者自身、即ち『カルストハンス』の作者自身が名を匿しきつたことは皮肉である。

対話を終始続ける三人の内、カルストハンスと大学生(ストッデンス)は親子である。後半部の冒頭で、「親父さん(「ごたくならべてないで」野良に行った方がいよいよ)と大学生がいうのに対して、「今は冬だ、畑に出ても無駄だ」と、カルストハンスがきりかえしている。即ち時は農閑期の冬、おそらくクリスマス休暇で帰省している大学生と、客人メルクリウスが、カルストハンスと同座しているところへ、ムルナーとルターがこもごも立ち現れる、といった設定になっている。もちろんこれは演劇ではないから、ト書にあたるものは一切無いが。

農民カルストハンスの息子が大学生であるというのは、やや意外な印象を人によっては受けるかもしれない。今はともあれ昔の農民といえば、階級的に虐げられたもの、

あるいは、文化的に見下されているもの、というイメージが何となく一般的だからだ。実際一五世紀半ば迄は、大学そのものが少なかった事もあるが、農民身分と正規の大学生活とはあまり縁がないと考えられよう。しかし人文主義とローマ法継受の趨勢のなかで、五指に余る新しい大学が設立された一五世紀後半から一六世紀になると、農民の子にして大学を出る事は、例外的ではあるにしても決して閉ざされた道ではなかった。とりわけ『学者達の共和国』とよばれる人文主義者達のなかには名のある者がみられるのである。二、三例を挙げれば、テュービンゲンで修辞学を教授した桂冠詩人ハインリッヒ・ペーベル（一四七二—一五一八）、エアフルトで学び教育者となったオイリキウス・コルドゥス（一四八六—一五〇八）、ハイデルベルクやフライブルクに学びエルザスで出版や教育に従事したマティアス・リングマン・フィレシウス（一四八二—一五一二）、そしてドイツ最初の桂冠詩人であり人文主義の泰斗であったコンラート・ケルティス（一四五九—一五〇八）もまた葡萄栽培農家である親元を出奔した経歴の持ち主であった。もっともカルストハンスの息子は、これらの人々のよ

うに新しい思想的潮流である人文主義ではなく、スコラ学を学んでいるらしいし、異端審問を司るドミニコ会の牙城ケルン大学に籍をおく彼に対して、父親から豊富な学資が送られている。「息子、お前はわしより良くわかつてはるはずだ、ケルンの大学に行つてお前には随分金が掛かっているんだぞ」とカルストハンスは言うし、息子の大学生は、ケルンではドミニコ会の修道士や博士達、なかでも異端審問官のホッホシュトラーターの講議を聞いた、と答える。ヤーコブ・フォン・ホッホシュトラーター（一四六〇頃—一五二七）は、ヘブライ学をめぐるロイヒリン論争以来、スコラ学派の総帥として人文主義者達に忌み嫌われた人物である。

カルストハンスはこのように、息子を大学にやる余裕のある農民という事になるのだが、更には村のフォークトを務めることも、対話の経過とともに明らかに。つまり彼は、我々がともすれば想像しがちな、一介の農民ではなく、「御領主様に代わって村で裁判をする」役目にある、村方のインテリないし情報通であり、指導者である。ただしそのカルストハンスにしても、ルターの本は「読んでもらって」いるし、「ラテン語はでんか

ら」「わしらの言葉、ドイツ語で書いて下され」とルターに頼むのだが、『カルストハンス』出版時の、都市を中心とする通常の読者層のみでは説明しきれぬ幅広い人氣には、対話の主人公のこの社会的地位がある程度与つて力あったのではあるまいか。南西ドイツやスイスには、この主人公に似通つた境遇、あるいは少なくともそれを望みうる農民層があり、感情移入とまではいわなくとも、共鳴を覚える土壌があった、と思われるのである。そしてそれはまた、一五二五年の農民戦争後、カルストハンスの名がハタと見られなくなる一因であるかもしれないと筆者は想像する。

先には「客人」と書いたが、メルクリウスは正体のしれぬ人物である。版画ではバレッタ帽をかぶり、髭をのばし、巻物のような物を手にしている、つまり風儀からすれば学者らしく、口から発する警句風の皮肉な片言隻語も、例外を除けば、ことごとくラテン語である。その呼吸を日本語に移すのは難しいが、たとえばムルナーをこきおろす一場面で、息子が「親父さん、馬鹿なこと言いなさんな、この人は練達のジュリストだぜ」と父をた

しなめると、カルストハンスが、「冷血のクリスト者かね、それともチェスト(木箱)のたぐいか」とやり返す。するとすかさずメルクリウスが一言「マコト、ヤクザナ箱ヨ」(ウェーレー、キスタ、ネークイティエ「!」)とやる具合である。ドイツ語のユリスト(法律家)とクリスト(クリスト者)の語呂合わせである諺「ユリストは冷血のクリスト」に、アルト(練達の)とカルト(冷血の)、そして木箱を意味するドイツ語とラテン語のキステとキスタを絡ませたこのやりとりが、多少の悶着の末あえて法学博士号を取得した神学博士ムルナーを揶揄するものである事は、当時のパーゼルやシュトラースブルクの事情通には一見して明らかであつたらう。我々が見逃してはならないのは、この場面同様おおむねカルストハンスをバックアップする感のあるメルクリウスとはいえ、そしてそれが作者の意図に添うものであるとはいえ、究極のところ両者には微妙に相容れないもののある可能性もこの場面が垣間見せていることである。それは他でもない、ラテン語の使用と法律の問題である。先にも触れたように村のフォークトであるカルストハンスが、*古き良き法*の信奉者であることは疑いない。中世に

於ては「古き」とは年代的に古いというよりは「有効な、正しい」と同義である事をO・ブルンナーが指摘しているが、農民戦争がほとんど目睫の間に迫るこの時期もこの点では同様であるといえよう。「ユリスト」なら「冷血のクリストか」と咄嗟に半畳を入れるカルストハンスは、ローマ法の継受と学識法曹の増加する時の流れの中で、旧来の権利を奪われようとする立場にある。強制と禁制の及ぶ村の範囲内で有効であった慣習的法知識と判断力は、より普遍的で整合的な法体系にじりじりと圧迫されているのである。このような変化に対する一般的で

かつ具体的な不満の代表例は『農民の十二箇条』の第九条にみられるが、事がひとたび訴訟に及び専門家が関与した場合に、学識のない「古き良き法」信奉者の最大のうらみは、ラテン語という自分達に馴染みのない武器を操る相手によって一方的に論破され一種欺かれた感の残る点にある。メルクリウスは「ユリスト」ではないし、むしろカルストハンスに味方するものとして作者は登場させているのであろうが、それにも拘らず農民カルストハンスは、「いつもラテン語をベラベラやっている」知識人メルクリウスの発言をたえず誤解し苛立っている。

それがもつばらムルナーを茶化す為の工夫からきているとはいえ、期せずして作者は事の核心に触れている、と言つてよいのかもしれない。

五人の登場人物について、その発言がドイツ語に対しラテン語でなされる比率の高い順に並べてみると、メルクリウス、息子の大学生、ムルナー、ルター、カルストハンスとなろうか。ムルナーはこの他に猫語ともいふべきものを使われており、そのラテン語使用も厚顔無知とインチキを隠すためと、読者に納得させる塩梅である。先に見た序文ではラテン語を使わぬ事が非難されたが、今度はそのラテン語が不純であると、『蒙昧者達の手紙』流に風刺されているわけだ。大学生はいわば狂言回しであるから、時には正確に、時には故意に意味をずらせて、メルクリウスやムルナーの言葉を父親に伝える。ルターは挨拶以外ラテン語を使わず、カルストハンスは全く使えない。作者の同情がこのような構図の上で両極を成すメルクリウスおよびルターとカルストハンスにある事は明らかであるから、ウォルムス国会(一五二一年一月―五月)がまさに始まらんとするこの時点において、ルターに好意的で、上層部とはいえ農民身分に積極的に呼び

かける姿勢をもつ、おそらくは人文主義的教養人が作者の姿として浮かび上がってくる。

というのも、得体のしれぬ人物メルクリウスは、デシリウス・エラスムス・ロッテルダムスの『俚諺集成』(アダギア)に由来すると思われるふしがあるからだ。ギリシャ、ラテンの典籍から採った格言俚諺に独自のコメントを付したこの書の名が大学生の口からもれている。無論それは『阿呆祓え』『悪党組合』『アッホーが原』などの風刺書で専らドイツの諺を活用したムルナーの、「読んだもの」ないし「異国のせせらぎ」ではなく「自前の泉」から汲んだ、という自負を、夜郎自大的な無教養の現れとして嘲弄するコンテクストにおいてであり、母語文学の育成より古典文学的知識を尊しとする平均的人文主義者の考え方を示すといえよう。ウエルギリウスの『アエネイス』を翻訳するなど古典的教養に欠けるわけではないムルナーだが、その本領は民衆的表現を生かすところにあり、それはそれで時代が変われば、少なくとも文化史や言語史にとって重要な原典資料として評価されることになる。だがそんなことは往時の平均的人文主義者に思いもよらなかつただろうし、『カルスト

ハンス』の作者はともあれドイツ語で農民ないし民衆の指導層に呼びかける必要を感じていたのである。

それはさておき、エラスムスの『アダギア』に、「ヘルメスの御到来(メルクリウス スペルウエニット)」という格言の項があり、プルトアルコス『饒舌について』が典拠であること、会話が突然途切れ一同が沈黙することを意味し、話術の祖とされるヘルメス(メルクリウス)神の臨場とあつては人間は口を閉ざさざるをえないところからきている、と記されている。『カルストハンス』の作者がこれをふまえて、メルクリウスの警句、片言隻語をもって対話の流れを調節している事は疑いないであろうし、その際メルクリウスの用語としてラテン語が選ばれても不思議はない。

ところが奇妙な事に、終始ラテン語のメルクリウスの発言が突然ドイツ語になる箇所があるのだ。しかもその内の一つは、ベッキングがどういふ訳かメルクリウスではなく大学生の発言としていられるもので、フルークシュリフテンの諸版も表記に異同があつて意味がとりにくい。一応訳してみると、甘いくち、かわいいあまっこの色男、となるのだろうが、A・E・ベルガーはこれに注記して、

まことにその服が示すとは全然べつもの、という意味の現代語訳にしている。どうしてそうなるのか、筆者にはわからない。いずれにしてもここは、ムルナー即ちムル・ナル（雄猫・阿呆）という名前のもじりから発展した、僧服のムルナーは好色漢、というお定まりの風刺の脈絡にあり、ここで用いられている「シュバルネースライン」という意味素性の定かならぬ言葉を、ムルナーは『ルター派大阿房』（一五二二）の中で逆用し、恋歌のパロディーに仕立てあげている。更にその一年後バンフィリウス・ゲンゲンバッハがムルナーをたたく『ノヴェラ』（一五二三）の中でこの語を用いているところを見ると、当時は敵味方の間になにか共通理解があったと思われる。今はしばらく不明のままにせざるをえない。

メルクリウスがドイツ語を発するもう一つの箇所は、発言者の名を書き間違えた単純なミスか、と筆者ははじめ疑ったのだが、どの版も交わりないところを見ると、改めて奇妙な印象を禁じえない。ここは文意は比較的単純で、カルストハンスが、ローマ教皇派は全福音書の中から四つの文を取り出し拡大解釈している、その第一は「汝はベテロなり、我この磐の上に我が教会を建てん」

だ、と言うと、メルクリウスが、それは値打ちある一行だ、すこぶる有益、と合の手を入れるのである。このあと再びカルストハンスの発言となり、ベッキングその他の校訂版ではそのように直してあるが、筆者の見た四つのフルークシュルフテンはいずれもカルストハンスの名言区切りがなく、あたかもメルクリウスの発言が続くように印刷されている。どうもこのあたり混乱があるようで、もし右に引用したメルクリウスの言が、例えば大学生に本来割り振られるべきものが誤ってメルクリウスの言とされたとでもすればともかく、原文通りならその意味するところは当然アイロニーでなければならぬ。しかし先にふれたシュバルネースラインの場合と違って、是非ここでメルクリウスがドイツ語を使わねばならぬ理由も無いと思われる。後から書き込みでもなされたか、あるいは何かの都合でラテン語化するのを作者がうっかり忘れたのであろうか。

対話は「ムルマオ、ムルマオ」という猫の擬声語で始まる。カルストハンスと息子の大学生の間でしばらく、猫などでごえて人にすりより女の膝を好む、目は狼の目で

魔性がある、主人の仕打ちが気に入らぬと仇を返す、といった猫談義がある。おや、猫かと思ったら、人間様、それも聖職者、という調子でムルナーが登場させられ、大学生が父親にムルナーの身分肩書を紹介する。修道士といっても服装だけの勝手な身分、俗臭芬々、それにしても臭いな、なにやら雪隠後架の臭いがする、という具合に散々な目に遭ったムルナーは、戸口にルターが現れたと聞くと、たちまち逃げ腰になる。なぜ一緒に議論をしないのか、とかくカラスは群れるというに、とカルストハンス、彼はカールシュタット、ルターとエックの間で戦わされたライプツィヒ論争（一五一九年五月二七日―七月一五日）ばかりか、刊行されて間もない『エックウス・デドラートゥス』の内容についても一部は知っている口ぶりである。エラスムスの『アダギア』が話題になり、それに比べれば「ガチョウや阿呆や悪党、やくざ」の諺か、とやられたムルナーは、「全くおまえは名前どうりだ、カルストハンス、阿呆本でおまえにその名を与えたのはこの私なのだが」と言いつつ、ルターの影におびえるように、裏口から逃げ出していく。でがけに更に、『教皇制度について』と『兄弟としての警告』を

グリーンニンガーで買って読め、と自薦の辞、カルストハンスはその後ろ姿に「十字をきり」「アーメン」と言う。

以上がもっぱらムルナーを風刺する前半部の大筋だが、初めは全く無知の装いをしたカルストハンスが徐々に切れ者、情報通の顔を持ち始め、と同時にその背後に作者の影がちらつき始めている事も否めない。ここで「阿呆本で名を与えた」云々とは、阿呆本という意図的、軽蔑的表現から直ちに想像されるムルナーの韻文風刺書『阿呆祓え』や『アッホーが原』ではなく、その思想的評価は別として少なくとも内容表現ともに生真面目そのものの散文『教皇制度について』を意味している。その中でムルナーは「ハンス カルストと暴動を好む連中」「ハンス カルストはきつと君等聖職者を身ぐるみはぐぞ」と、ルター及びその仲間に対して警告を発しているのである。ライン河をはさむエルザスやズントガウのプリントシュエ運動を身近に見ているムルナーは、農民にわたかまる社会的不満にある程度理解を示しつつも一揆的傾向に対しては強い警戒心を抱いていた。「ハンス カルスト」はそのような傾向を象徴するものとして、『ドイツ

国民の貴族諸侯に寄せる』において即位間もない皇帝カール宛て序文で「この暴動を好む不逞の輩ハンス カルスト」とも呼ばれている。既に述べたように、カルストハンスという語の文献上の初出はカイザーズベルクの説教集にみられる。だがそれとムルナーの書との出版時期の違いは僅か数カ月である。『カルストハンス』の作者がムルナーに反駁する意を含めて、ハンス カルストをあえてカルストハンスとした可能性が全く無いとはいえない。

というのも、上(オーバーカイト)の不正に対する抵抗権ともいふべきものについて、後半部でカルストハンスが微妙な意見を述べ、暴動を好むというイメージの修正を試みているからだ。反乱や暴動を望まぬならばローマ教皇をはじめとする上司に口だししない方が良い、という息子に対しカルストハンスは、反抗したりやつつけたりしてもよいとは言わぬが、公に反論する権利はある、と強調し、現今のローマ教皇の指導は首が首の手を引くようなもの、と何やらブリュエゲルを思わせるような比喩を使い、聖書という正しい眼鏡を通して見るべき事、王侯や高位聖職者が下々の意見を入れたため流血が避け

られた例が多い、と述べる。一言でいえば穏健な良識派のイメージをうちだしているのである。もっともその後すぐに、一年前暴君として国を追われたヴェルテンベルク公ウルリッヒの事件に触れざるをえないのは、時代がなおフェーデの風を残し、なまなか言論のみでは万に片が付かない事を自ずと示している。三年余後には農民戦争の火の手が、『カルストハンス』の流布領域とほぼ一致するとみられる南西ドイツ一帯に上がる。しかも運動が急進化するにつれカルストハンス流の穏健な意見は置き去りにされ、運動が鎮圧され反動の時となればもはや捨てて顧みられぬ過去として埋もれる。

だがこの年カルストハンスは潑刺と生きていた、カルストならぬ穀竿(フレーゲル)を振り回して。「わしの穀竿はどこだ(ぶん殴ってやる)」という得意の文句が、テクストの要所要所で都合四度繰り返される。初めはいうまでもなく魔性の猫すなわちムルナーが対象だが、二度目は「異端者」と紹介されたルターに向かつて、たたくき出すぞ、といわんばかりである。しかもそれをきっかけに、ムルナーに代わって登場したルターに対するカルストハンスの一方的傾斜、信服が始まり、以後の二回の

用例および類似表現は全てローマ教皇制に対する反駁の意志表示となる。即ち「單純素朴（アインフェルティヒト）」だが正しい分別を持つ農民を象徴するものとして穀竿は、この年の夏ツェーリッヒで出た『神の水車小屋』と題する寓意詩や、おそらく二三年頃ツヴィッカウで印刷された『農民の敵よりカルストハンスに寄せる第二の回章』という皮肉な題を持つ文書の、タイトル版画にも出現することとなる。

さて、外国の者に騙され嘲笑されている「ドイツ民族の單純素朴さ」故に立たざるをえなかった、というルターは、異端と決めつける前にムルナーのいうとおり双方の意見を公平に比べてくれ、と希望する。これよりムルナーの書を手にその代弁をする大学生と「單純素朴な」カルストハンスが議論する段取りになるのだが、ルターは、私の為に争ったり血を流したりしないで欲しい、と言いついて姿を消す。その後ろ姿に、なんと謙虚な、と感動したカルストハンスが、テキスト後半部で俄然雄弁になり、学のある息子を一方的に論破することは改めていうまでもない。そこで取り上げられるのは、先にも述べたようにムルナーの『ローマ教皇制度について』と

『ドイツ国民の貴族諸侯に寄せて』であり、『兄弟としての警告』はほとんどタイトルだけの言及にすぎない。序文との間に齟齬を来しているわけだが、カルストハンス自身も終わりに近付くにつれ、初めに較べれば些かおかしいほど学があり福音主義に通じているところを見せるようになる。特に『貴族諸侯に寄せて』に関する部分はいかにも生硬で行間に余裕がない。いまひとつ不思議な事に、前半部では教会の意味で Kirche 以上は Kirche というスペルが、又 sei の代わり sey という接続法が使われているが、後半部には見あたらない。植字・印刷担当者の単なる癖から生じた可能性も絶無ではないが、ひょっとして前後のあいだで作者側になにか変化があったのかもしれない。

「單純素朴」を自称するカルストハンスが相当な学殖を發揮して論議する後半部の主要テーマは、キリスト教会の「かしらと身体」の比喻をめぐる、靈的教会か制度的教会か、換言すれば、福音主義かローマ教皇制度主義か、という問題である。そもそも『教皇制度について』即ちキリスト教信仰の最高当局について」という表題からしてカルストハンスには気に入らないから、四折版六

丁半（一頁四一行で一三頁分）すなわち全文の三分の一以上を費やして漸く、批判対象であるムルナー書の序文の部分が片付くという具合いで、カルストハンス本人ならずとも、「いい加減にその本は終わらんかい」と呟きたくなるような、時代独特の執拗で思弁的な論議が続いている。その骨子はルターの『ローマの教皇制について、ライプツィヒの高名なローマ主義者を駁す』（一五二〇、六）およびムルナーの上掲書に基づくが、それでも時折、ローマ教皇や使徒の末裔が地の塩というも道理、その辛さは税や地代を払うとき身に沁みる、地獄の方が甘からう、等とカルストハンス流の辛辣なユーモアが顔を出し俗人読者に一息つかせる。だが残り二丁になってとりあげられる『貴族諸侯に』となると、もはやこのような息抜きは全く無く、コルプスという語についてのルターとムルナーの解釈の違いを銜学的な息遣いで論じている。「このラテン語に関係する全ての語を調べたが」とは、カルストハンスならぬ作者の真顔が覗いているのである。

それでは、末尾迫って「この猫を吊せ」等と、「単純素朴」な農民に言わせる匿名の作者は誰であろうか。通

説はスイス、ザンクト・ガレンのヨアヒム・フォン・ヴァット、通称ヴァディアンまたはヴァディアース（一四八四—一五五一）の名をあげている。ウィーンでケルティスやクスビニアースに学び、教鞭をとり、師やムルナー同様、桂冠詩人の榮譽を受ける。理学、法学、医学も修め、一五一八年に故郷ザンクト・ガレン市に専属医として帰還、二十年に市参事会員、二六年には市長。若い頃よりツヴィングリと親しく、ルターとも文通のある人文主義者で、一五二三年および二八年のツューリヒおよびベルンにおける公開論争で司会役をし、ザンクト・ガレンの宗教改革を推進。妻マルタは、旧教会制度に激しく反対し再洗礼派運動にとびこむコンラート・グレーベルの姉であった。

このように文才といい、教養といい、思想的傾向といい、条件は揃っているのだが、問題はヴァディアンが早くとも一五二二年半ばに至って初めて決定的に旧教会と袂を分かった、とされる点である。筆者はこの点を踏まえて、『カルストハンス』の作者がヴァディアンではない可能性を想定し取り組んでみたのだが、結果的にはむしろヴァディアンの確率が高いという印象を強くした。

というのは、先に挙げた Kitch および Sze という特徴あるスベルが、やはりヴァディアンが作者とみられる『豺狼歌』中にも見いだされたからである。これはバーゼルで一五二〇年か二一年に出されたもので、ナザレのユダ、という謎のような名前が付されている。本性を偽った狼に惑わされる「単純素朴な」羊、農民や職人に、真の牧羊犬(ルター)や主の事を教えたい、として、ローマ教皇制につながる者を四種の狼に分類、その弊害を列挙し、聖書を典拠とする豺狼警戒論を展開する。この発想や論証法自体は特に珍しいとはいえないが、定理(ザッツ)とか通則(レーゲル)という用語は当時における理学系の素養を思わせるし、「(狼の)形態と本性」や「自然学の師匠」という言葉はそのまま『カルストハンス』にみられるのである。のみならず結語部には、ルターの敵役エック博士やドミニコ会士達と並んで「ムルナル」が名指しされ、タイトル頁の版画には、ガチョウ(信者)を一網打尽にして筆ろうとする狼姿の教皇や聖職者の群れに、ラウテを弾く猫がまじっている。『豺狼歌』の作者と『カルストハンス』の作者はほぼ同一人物と考えられるのである。前者については同じくツヴィン

グリ信奉者で聖書の翻訳をしたレオ・ユート(一四八二—一五四二)が、ユダス・ナザレイと名も似ているところから、作者である可能性はないか、と一応疑ったが、まずありえないというのが現在の結論である。それより前者が変名、後者が匿名である事は、ヴァディアンが未だ態度を公然と表明していない事実とむしろ辻褄が合っている。彼はすでに一五一九年頃から思想的にもツヴィングリに共鳴しているとされ、そのツヴィングリとルターの聖餐をめぐる対立はまだ表面化していない。ツューリヒやバーゼル、ベルンといったスイス誓約同盟の有力都市が完全に福音主義化するのは二五年以降であって、事態はまだ極めて流動的であった。名を秘すに足る充分な理由があったのである。

最後に『カルストハンス』に直接つながる一連のフルークシュリフテンをあげておこう。『神の水車小屋』(一五二一年夏)は、ギリシャ語聖書を復活させたエラスムスを粉屋に、その粉をもってパンを焼く者をルターにみたて、カルストハンスが穀竿を振り回して警護、二人のスイス農民が論議する体の、ツューリヒで出た韻文パン

フレットである。これに対し『對話編 新カルストハンス』(同年晩夏)はマルティン・ブツツァーの作とされる散文で、カルストハンスとフランツ・フォン・ジッキンゲン、即ち農民と騎士身分の連帯を鼓舞し現状改革を企てるもので、シュトラースブルクで刊行された。『カルストハンスとケーゲルハンス』(一五二二?)は韻文による農民と鋤夫のやりとりを通じ、貧しい者の立場を強調する。篤志家によりラテン語から訳された、とあるが真偽不明である。『僧侶蓄妾排斥論』ではハンス・コルプなる者がカルストハンスの兄弟を称し、『農民の敵よりカルストハンスに寄せる第二の回章』では、右手にロザリオを持ち左腰に剣をさした男が、「富裕な」「農民

の大将」カルストハンスに説教している。「農民の敵」とは『カルストハンス』に「僧侶は常々農民の敵」とあるに由ると思われるが、この回章の論旨が奇妙に現実的なようで然も何か夢想的なものを感じさせるのは、あるいはこれがツヴィッカウの予言者ないしトーマス・ミュンツァーの系統に属するものであるのかもしれない。

カルストハンスに標的にされたトーマス・ムルナーは『ルター派大阿房』で猛反撃してみた。それに対しては更にバンフィリウス・ゲンゲンバッハが『ノヴェラ』で再攻撃を加えている。

(一九八五、十二、六)(一橋大学教授)